



NHKの朝の連続ドラマといえは、古くは「おはなはん」、かなり前で「おしん」が代表作だろう。近年はほとんど見なくなったし、記憶に残るような作品も少なくなったと聞く。

先般チャンネルをたまたま回していたら有線テレビで「おしん」の放映をやっていて、やはり引きつけるものがあるのだろう。思わず見てしまった。

見ているうちに一つのせりふに引かれた。おしんが思い出の地をたどりながら旅館で孫息子に昔話をするシーンで、孫息子が「おはあさんの時代は夢の持てる時代で良かったね。今は何でも手に入るけれど希望の

持ちにくい時代だから」と言うせりふである。

おしんは「そうだね。貧乏しなげと夢はあったね」と応じている。

「はて、どこかで聞いたような」という思いを強く感じた。

おしん



草野 義輔

はいつだった？と早速年代を調べてみると一九八三年四月から一年間の放映だった。

ということはもう二十年以上も若者が将来に希望の持ちにくい時代が続いているのか、と思いに至りがくせんとした。つまり夢の持てなかつたはずの若者たちは働き盛りの四十代になっている、ということだ。その四十代が若い者は夢がない、と嘆いている。

「夢」というものはどんな時代であっても見つめる気持ちが無ければ見つからない、ということだろう。われわれ大人の役割は「夢」を持つとうという雰囲気や気が若い世代に伝わるような生き方を示す以外にはないのでは、と思う。

何でも手に入り夢が持てない、ということとは近年聞き飽きるほど耳にする言葉で、意欲や希望を持たない若者の増加を心配してのことで、決して昔話ではない現代の世相である。ちょっと待て、おしんの放映

(日田市昭和学園高校理事長)